



で き ご と

平成30年1月18日(木)～19日(金)に、全国公共図書館研究集会(児童・青少年部門)が大阪市立中央図書館で開催されました。その基調講演と、事例報告を紹介します。事例報告は3つの団体からされましたが、そのうち特定非営利活動法人ハートフレンドの徳谷代表の報告を紹介します。(2ページ目にて、概要を紹介します。)(仲本)

平成30年2月22日(木)に、公立図書館等職員専門研修児童・青少年サービス研修を、静岡県立中央図書館で開催しました。講師には東京子ども図書館名誉理事長松岡享子先生をお招きしました。午前中は松岡先生の著書『子どもと本』を読み、各自が児童サービスをする上で「明日からできる具体的な改善策」を考えました。午後はお話の講習会を行いました。事前

に参加者から語りたいお話の希望を募り、うち7人が、参加者の前でお話会形式で語った後、松岡先生から講評や助言を受けました。県内の児童サービス担当者が参加し、熱気のある研修会となりました。(2～3ページ目にて、概要を紹介します。)(眞子、仲本)

「本とともにだち(中学生版)」配布開始

静岡県教育委員会社会教育課では、読書ガイドブック「本とともにだち」(中学生版)を改訂し、3月から配布します。中学生へのおすすめ本96冊を8ジャンルに分けて紹介しています。県内全ての新中学1年生に配布されるほか、市町立図書館や読書県しずおか book サイトでもご覧いただけます。(眞子)

◇子ども図書研究室現在のテーマ展示◇
◆卒園・卒業と入園 入学の本

最新の子ども図書研究室
だよりは、HPに随時
掲載しています。



子どもの本に関する賞(海外のおもな受賞作品)

◇海外の主な受賞作品のうち、最新受賞作をお知らせします。◇(※印は邦訳)

賞名	受賞作品
カーネギー賞	『Salt to the Sea』(Ruta Sepetys/作) ※『凍てつく海のむこうに』(ルータ・セペティス/作 野沢佳織/訳 岩波書店)
ケイト・グリーンウェイ賞	『There Is a Tribe of Kids』(Lane Smith/作) ※『こどものなかま』(レイン・スミス/作 青山南/訳 BL出版)
ニューベリー賞	『Hello, Universe』(Erin Entrada Kelly/作 未邦訳)
コールデコット賞	『Wolf in the Snow』(Matthew Cordell/文・絵 未邦訳)

イギリスの伝統ある児童文学の賞に、児童書を対象としたカーネギー賞と、絵本や挿絵を対象としたケイト・グリーンウェイ賞があります。一方アメリカでは、最も優れた児童文学にはニューベリー賞が、絵本にはコールデコット賞がそれぞれ贈られます。

全国公共図書館研究集会 児童・青少年部門 報告

基調講演では、子どもの貧困調査・研究などを行っている大阪府立大学教授山野則子氏から「子どもの最善の利益を考える～子どもの生活実態を知っていますか～」という演題でお話を伺いました。生活実態調査からわかる子どもの貧困状況、それに伴う学習理解度調査などをご紹介いただきました。また、貧困や虐待の原因となる親の孤立化問題についてもお話いただきました。更に、学校に専門職配置をし、生活支援や児童相談支援など、問題を抱えた子どもへの支援をつなぐ役割の必要性について、具体的にイギリスの例を挙げて説明していただきました。チャイルドケアセンターと共同して行われる母親への就労支援、学童保育の充実などが紹介され、山野氏は、安定した支援のためには制度設計の確立が必要と強調されました。

特定非営利活動法人ハートフレンド・徳谷章子代表の報告を紹介します。ハートフレンドは大阪市東住吉区に建てられた仮設消防署の跡地を借りて運営しています。そこは学校に行きづらい子どもの居場所、孤立化する母親同士の出会いの場、シニア世代の活動の場ともなっています。不登校の子が来て一緒に夕ご飯を食べて遊ぶ「てらこやワイワイクッキング」や、子育ての悩みを相談する「ママのホットサロン」などを開催し、子どもの活動を支援してくれるシニア世代も集っています。多世代の居場所となることで、包括的な子育て支援の実現を目指しているそうです。不登校の相談があれば区役所、こども相談センターとの連携も行うなど、ハートフレンドが親子と学校や行政の相談支援をつなぐことも、大きな役割と考えているそうです。徳谷代表自身も子育て中に不安や孤独を抱えていた経験があったそうで、今後も活動を続けていきたいという、強い思いを感じられるお話でした。(仲本)

公立図書館等職員専門研修会 児童・青少年サービス研修 「子どもと本を結ぶためにできること～『子どもと本』を読んで～」報告

今回の研修は、事前課題として松岡先生の著書『子どもと本』を読み、「子どもと本を結ぶということ」を考えた時に特に関心を持った章をひとつ選び、考えや疑問、体験などをまとめました。その課題を踏まえ「明日からできる具体的な改善策」を考えました。前半は選んだ章ごとにグループを作って感想や問題意識を話し合い、後半はメンバーを換え、前半で話し合った内容の報告やより良いサービスをしていくための方策を考えました。

グループワーク後は発表をしました。「情報共有や複数人での選書の大切さを感じたので担当者会議を開催したい」「選書をするこの責任を改めて感じた。開架と閉架を使い分けて蔵書構成を考えていきたい」「どうしたら子どもを本好きにできるかと質問されることがあるが、誠実に良い本を選んで環境を整えることもひとつの方法。良い本を読むことからはじめたい」「学校図書館と連携していくために、教員向けにすすめる本のリスト配布したい」「子どもにサービスをするためには、大人を納得させる言葉を持ちたい」など様々な意見が出されました。なかでも児童サービスに携わる「人の問題」を多くの人を感じているようで、職員の雇用形態の問題や意識共有の大切さの他、「組織として継続したサービスをするために図書館員が育つ環境をつくりたい」「利用者を育てることはもちろんだが、行政に働きかけて図書館に関心がない自治体職員や図書館職員も育てたい」などの声もありました。

全員の発表の後、松岡先生にご講評をいただきました。まず、学び続けることが大切だけれども、協力し合ってその負担を減らす工夫のご提案がありました。良いと思った新刊を紹介し合うことや、補充リスト（経年劣化等で廃

棄する場合にも必ず同じ本を新しく買って補充すべき本)を共有する等です。

また、図書館で待っていても子どもは来ないので、学校や児童福祉施設、行政機関などと連携していくことが必要とのお話もありました。その例として、米国やスウェーデン、韓国の図書館の革新的な児童サービスの例を挙げられ、それらを始めた図書館員たちの現状を突破する力、子どもの読書環境を整えることは将来の良い市民を育てることだと行政や首長に訴えるエネルギーを見習って欲しいとも仰いました。

真面目で誠実なだけではなく、置かれた環境に甘んじることなくエネルギーをもって児童サービスに取り組んでほしいとの叱咤激励を受けました。子どもと本の大先輩である松岡先生の言葉を受け、子ども図書研究室としても県下の児童サービス担当者、さらに子どもと本をつなぐ活動をしている方々が繋がり協力し合って、子どものより良い読書環境を作る方法を考えていきたいと思っています。(眞子)

お話の講習会報告

お話の講習会は、7人が参加者の前で語った後、語り手が選んだお話について気になっていることなどを松岡先生に質問し、講評や助言を受けました。お話は『風の神と子ども』『だめといわれてひっこむな』『おいしいおかゆ』『スヌークスさん一家』など、日本・外国の昔話や創作を取り混ぜ、種類に富んだ内容となりました。松岡先生は、今回語られたお話や語り手への助言を核にして、そのお話の性質やポイント、お話を語る時の注意点の2点について、詳しく話してくださいました。

まずお話の性質やポイントについて、個々のお話ごと次のように教えていただきました。

・『風の神と子ども』は、次どうなるの?と出来事で子どもを引きつける話ではなく、どこか遠いところへ連れていかれる不思議な雰囲気を持ったお話。その雰囲気を聞き手に伝えること。

・『だめといわれてひっこむな』は、ねずみの可愛らしさを十分に聞き手に伝えてほしい。

・『おいしいおかゆ』は短いお話の中で、食べるものがない女の子とお母さんという現実的な出来事と、森の中でおばあさんが、おかゆが出てくるおなべをくれるという非現実的な出来事との切り替えが難しい。それを語り手がきちんと受け止めて語ることが大切。このお話を一番楽しめる年齢は3歳~5歳で、この年齢の子どもたちはその非現実感をととてもよく楽しむ。

・『スヌークスさん一家』は、自分たちではろうそくの火を吹き消せない一家が、その一方ではガウンを着た上品な人たちであるという、本来の話の筋とは異なった面白さもある。それを語り手が充分に感じて語ると子どもに喜ばれる。

◆
語るとき注意点について教えていただいたことは、次のとおりです。

- ・語り手の顔の表情が動くと、聞き手も楽しい。
- ・大事なことを言うときは声が消えてしまわないよう。聞き手にお話が届くように。
- ・おはなしに合った身振りであればしても良い。大げさ過ぎてお話に合わない身振りは、聞き手の反応を見ればすぐに分かるので、改善する。
- ・語り手がそのお話を面白いと感じていれば、聞き手にも伝わり、楽しむことができる。
- ・こういう語り方をしなければ、という決まりはない。語り手の特性によって個性がある。
- ・お話は口承文芸であるため、出版されているテキストが最終テキストではない。昔話は最初テキストに忠実に語り、合わないところがあれば変更することもある。ただし、創作は著者がいるものであるから、決して変えないこと。

◆
先生の助言は、先生自身の語りも交えながら行われ、個々の質問にもきめ細やかに答えてくださいました。全体を通し先生は、語り手は真面目すぎないように、語るお話を楽しんで、と仰られ、お話を楽しむことを忘れない大切さを改めて教えていただきました。(仲本)



知識

『珍獣ドクターのドタバタ診察日記』
田向 健一／著
ポプラ社
2017年8月

百種類以上の動物を診察してきた動物病院院長田向先生が、紐を飲み込んだ犬の手術、卵巣が病気になったカエルの手術など、多くの具体例をわかりやすく挙げながら、動物を治療する大変さ、治ったときの喜びを伝えてくれる本。獣医になるために大学で学ぶこと、獣医になった後も難しい症例を学び続けることなど、進路選択に役立つ著者の経験も豊富に書かれている。動物の命について、著者の持つ考え方も丁寧に書かれており、動物好きな子どもには特に興味深い内容となっている。【中学生から】(仲本)

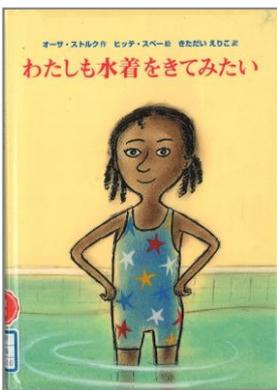


文学

『パンツ・プロジェクト』
キャット・クラーク／著
三辺 律子／訳
あすなる書房
2017年10月

中学に入学したリヴは制服のスカートが嫌でたまらない。それはリヴの外見は女の子でも、心が男の子だから。スカートの下にパンツを履いてみるが校則違反だと叱られるし、周りからは変な目で見られて親友からも距離を置かれてしまう。なぜ女子はスカートと決まっているの？みんなに＜秘密＞を言うことはできない、でも自分らしくいたいただけなのに。そこでリヴは校則を変えようと「パンツ・プロジェクト」を考え出す。思春期の悩みや友情が軽く読みやすく書かれている。【中学生から】(眞子)

文学



『わたしも水着をきてみたい』
オーサ・ストルク／作
ヒッテ・スパー／絵
きただい えりこ／訳
さ・え・ら書房
2017年10月

主人公の少女・ファドマは、学校のプールの授業はいつも見学。彼女がスウェーデンに来る前に暮らしていたソマリアは、イスラム教の国で、男性と一緒に泳ぐことが許されないからだ。けれど、楽しそうな皆の姿を見て、泳ぎたい気持ちだんだん膨らんできたある日、学校の先生に女性だけの水泳教室があることを教えてもらう。そこでファドマは思いきって母親に相談するが…。文化や慣習の違いに戸惑いながらも乗り越えようとする少女の心情を丁寧に描いている。【小学校高学年から】(安田)

絵本



『なんにもせんにん』
唯野 元弘／文
石川 えりこ／絵
鈴木出版
2017年8月

仕事もせず遊んで暮らしている若者が道で拾った壺の中には小さな人がいた。なんにもしないで遊べば遊ぶほど「なんにもせんにん」の身体は大きくなっていく。そんな時に近所の人に頼まれしびしび働いて帰ると「なんにもせんにん」は朝よりも小さくなっていった。

働くことで困りごとが解決し、働く喜びも得られるという筋。話の運びがまっすぐで、内容も面白い。絵も素朴で温かみがあり話にあっている。山口県に伝わる昔話で、作者の唯野氏も山口県生まれである。【幼児から】(青山)